国語　松本大学　2025 年度一般選抜 A【一日目】　出題の意図

第 1 問は稲垣栄洋の随筆『生き物の死にざま』「ホタル」の全文、第 2 問は橋本治の論説文『知性の顚覆』の一部を問題文として用いた。

第 1 問の「ホタル」では、季節外れの時期に、しかもホタルが棲息しているとは思われない場所で、たった一匹のホタルを見た筆者の感慨がつづられている。個人的な思いや考えによって勝手に想像するのではなく、あくまでも文脈に即して筆者の思いを正確に読み取る力があるかを問うべく出題した。

また、第 2 問で問題文とした文章は、自己の在り様よりも標準語のような架空で観念的な価値を優先させたことが、日本語能力にマイナスの影響を及ぼしたことを述べたもの。受験生にとってはあまりなじみのない内容で取り組みづらかったかもしれないが、言語に関心を持つことは大切なことであるとともに、難度の高い文章を読み取れるだけの読解力を身につけていることが大学生活を送るうえで非常に重要であることから、あえて抽象度が高く読み取りづらい文章を出題した。なお、出題においては、全体の論旨を踏まえて内容を把握できているかを見るために、ポイントとなる箇所の内容説明問題を中心にし、文脈把握力を問う空欄補充問題を交えた構成とした。

国語　松本大学　2025 年度一般選抜 A【二日目】　出題の意図

一般選抜 A 一日目と同様、読解問題 2 題を出題している。

第 1 問は梅棹忠夫の『狩猟と遊牧の世界』と題された講演記録を題材に出題した。動物の場合と違い、人間は「一種類一生活様式」という原則をとらず、まったく異なる生活様式をもつ民族が同時に共存している。そのため、骨による形態の進化を見るという手法とは別の方法で生活様式の進化を調べなければならないというのが筆者の主張であり、この主張を正しく読み取れているかどうかがポイントになる。なお、作問にあたっては講演記録ということもあり比較的読みやすい文章であることから、論の組み立てが正しく把握できているかを見ることにウエイトを置き、理由把握問題を多く出題した。

また、第 2 問は坪内稔典の『老いの俳句』から出題した。「古池や蛙飛びこむ水の音」という俳句をどう読み味わうかから始まり、新しい読み方によって新しい命を獲得するのが古典であること、芭蕉の文学が老いの文学であることなどが述べられている。出題にあたっては、内容説明、理由説明、抜き出し、空欄補充などいろいろな角度から出題したが、いずれの問題も本文に述べられている各内容が正しく読み取れているか、文脈を正確に辿ることができているかを見ることに主眼としている。

国語　松本大学　2025 年度一般選抜 B　出題の意図

大学で学ぶにあたり、必要とされる読解力が十分に身に付いているかを見るため、大問２題の読解問題を出題している。本年度については、第１問は宇根豊の『日本人にとって自然とは何か』から、第２問は高橋睦郎の『恋のヒント』所収の「和習ということ」の全文を出題した。

大問１の出題文の著者宇根豊は、百姓に専念しながら、農業の近代化を深く問い直す思想的な営みを続けている人物であり、出題文には、身近な生命と同じ立場に立ち、同じ環境をともに生きていこうという筆者独自の生命観が描かれている。出題にあたっては、問三、問六、問七など、そのような筆者の生命観が読み取れているかを問う問いを中心に出題した。

また、第２問の出題文は、ニッポンの特性は、オリジナルなものがないという劣等感のもとに、あらゆるものを異文化から吸収し変容させていることを述べた文章である。シュペリオリティー・コンプレクス、インフェリオリティ・コンプレクスなどの言葉に戸惑ったかもしれないが注も付しており、また日本人論、日本論としてよく指摘されている内容で分量も 2500 字前後と短く、読み取りに困ることはなかったのではないかと思われる。そこで出題においては、第１問と同様、筆者の主張が読み取れているかを問うことをメインに、接続語の空欄補充など文脈の理解を問う問題を絡ませて出題を行った。

国語　松本大学　2025 年度一般選抜 C　出題の意図

第 1 問では青木保『異文化理解』、第 2 問では藤田弘夫『都市の論理』から出題した。

第 1 問の『異文化理解』は、異言語だけが異文化を異文化たらしめているのではなく、コミュニケーションにおけるいくつものレベルや、精神活動の象徴であるイメージなど、複雑な要素が絡まって異文化を異文化たらしめていることを述べたもの。また、第 2 問の『都市の論理』は、農村が大規模な食糧不足に苦しむときにも都市では食糧不足の影響が限定的であるという一見すると奇妙な現実を過去の歴史も踏まえて説明したものである。二つの文章とも硬質の論説文であるが、論旨は明快な文章を選定しており、文章読解力を問うのに適している。論説文のジャンルは広く芸術論や文学論、さらに社会科学、人文科学まで広範囲に及ぶが、日頃から興味・関心をもって知識を深めるとともに、論説文や評論文など論理的な文章を読みこなせるだけの読解力を養っておくことが望まれる。

作問にあたっては、文章全体の趣旨を正しく理解しているかを問うことを中心に、筆者が伝えようとする内容やニュアンスを的確に読み取れるだけの正確な判断力、解答の論拠を探し出すための発見能力等も問うよう作問を行った。また、日ごろの学習成果が図れるよう漢字問題等もバランスよく織り交ぜて出題している。